

Funai Overseas Scholarship 留学前報告書

2015.6 宮武平

2015年3月に東京大学工学部機械情報工学科を卒業し、同年8月よりHarvard School of Engineering and Applied Sciences, Mechanical EngineeringのPhD課程に進学予定の宮武平です。Harvardでは医療・福祉用ロボットの研究を行う予定です。今回の報告書では大学院留学までの経緯を書かせて頂きます。今後大学院留学を考えている人には一つのケースとして参考にして頂けたらと思います。

大学院留学のきっかけ

私がアメリカの大学院に進学することを決めたのは学部3年生の時に交換留学制度を使って1年間カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)に留学していた時でした。UCLAではコンピュータ・サイエンスを中心に授業を取っていた他、初めて研究室に所属し、研究に関わる機会が得られました。その研究室や授業などで出会った大学院生の圧倒的な知識量・議論やプレゼンのスキルを目の当たりにし、自分も大学院生としてここに戻ってきて研究者としてのトレーニングを受けたいという思いを持ちました。また、当時の自分は年中カラッとした気候・ビーチなど自然への近さ・音楽イベントの充実・風通しがよい校風などからロサンゼルス/カリフォルニアの土地に恋に落ちていました。その思いから留学中にGREも受験し、2年後にカリフォルニアに戻ってくることを心に誓って帰国しました。東京大学の4年生になり卒業の研究室に配属され、その研究室の環境が申し分なかったために後ろ髪を引かれる思いもありましたが、エイヤッとアメリカの大学院を受験することに決めました。GREの受験を既に済ませていたこと、アメリカの大学院ではお給料を貰える可能性が高いということ、そして前述の通り充実したコースワークなど総合的なトレーニングを受ける環境が整っているように思えたことがその理由です。この時、日米両方の大学院を受験しリスクと労力を分散させるよりは、背水の陣で挑んだ方が力を発揮できると考え日本の大学院は受験しないことに決めました。出願校を選ぶ際には、一旦カリフォルニアへのこだわりは忘れることにしました。というのも、住めば都という言葉の通り、4年前に北海道から上京した当初は「どこに行っても混んでるし梅雨は不快だし夏は暑いしこんな所に長く住みたくない」と思っていた東京も今ではすっかり居心地よく感じていることに気づいたからです。結局はどこの土地にしようが順応できるだろうから、カリフォルニアに拘泥して他の可能性を潰すのはもったいないと思いました。

大学院受験

研究業績がほとんどない学部生の私がアメリカのトップスクールの大学院に合格するには、直接先生に会いにいて事前に先方に印象付けるしかないと思い、興味のある研究室をリストアップし、メールでアポイントメントを取り、夏休みの間に2週間で9つの大学を訪問しました。その際は訪問先の先生の代表的な論文と新しい論文を読み、質問を用意していくことで熱意と最低限の知識があることをアピールしました。訪問した研究室によっては外部に発表していない最新の研究を紹介してくれたり、たまたま訪問した日が研究室ミーティングだったためにそのミーティングに招いてくれたり、内部の学生に受験のアドバイスを訊けたり、収穫の多い旅となりました。今後大学院受験を考えている人には興味のある研究室は受験の前に是非

訪問するようお勧めします。時間的・金銭的な制約もあると思いますが、私は夜に移動し、その飛行機・夜行バス・列車で寝る事で時間とホテル代を浮かせ、平日1日につき約1校のペースでアメリカ中を廻りました。

受験時には、夏に訪問した9つの大学の中から5校とそれに2校を加えた計7校に出願先を絞りました。出願先の先生とはなるべく密に連絡を取るようにし、自分の研究の状況や、奨学金に採用された旨を報告しました。Funai Overseas Scholarship に採択されたことを伝えるとほとんどの先生からとてもポジティブな反応を貰うことができました。推薦状に関しては、それまで研究や授業でお世話になっていた東大の先生2名とUCLAの先生1名にお願いしました。3名ともアメリカでの研究経験があり世界的な研究実績のある先生だったため、自分にとっては大きな強みとなりました。エッセーは先生や複数の英語ネイティブに見て貰いブラッシュアップしていきました。

結果は、7校のうち4校(うち一校はMS課程)が合格、3校が不合格でした。不合格になったうちの1校は先生との連絡状況からいい感触を得ていたものですが、"長期的なファンディングを保証することができないため今年には学生を取ることができない"との連絡がありました。不合格だった他の2校はPhD課程への応募要件として既にMSを取っていないといけなかったためMS課程に応募した大学でした。その2校のMS課程の選抜に関しては、教授個人個人が決定権を持つというよりは、大量の応募者のスクリーニングをバッチ処理的に行っている側面があるようでした。そのため、GPAやGREのスコアがあまり高くなかった私は合否を議論される俎上にさえ上がらなかつた可能性もあります。逆に言うと多くのPhD課程に関しては、スコアが高くなくても特定の教授にアピールすることができれば合格できる可能性があると思います。(選抜の基準や方法については大学・専攻・プログラムによって違うので、気になったら自分が受験するプログラムについて探ってみてください。公表されていなくても内部の先生や学生が知っている場合があります。)

進学先の決定

出願した時点で全ての大学・研究室に魅力を感じていたもので、合格した中から1校を選ぶのは葛藤しました。最終的には合格者を招くOpen Houseで活気を感じたHarvardを選びました。Open House時の羽振りの良さには裏付けがあったようで、直後にHarvard工学部(School of Engineering and Applied Sciences)に対してHarvard史上最大の寄付があったというニュースが報じられました。Harvardというと近所にあるMIT等と比較するとあまり工学系のイメージは強くありませんが、それに負けるものかと年々拡張しているHarvardのリソースを目一杯使い、研究に精進したいと思います。大学の学期が始まるのは8月下旬からですが、8月上旬から留学生用に開講されるアカデミック英語のプログラムに参加する予定です。

以上を留学前の報告書とさせていただきます。

金銭面以外でも、進路相談に乗って頂いたり、他の奨学生との交流の場を設けて下さったりと、渡米前から寛大なサポートを提供して下さっている船井情報科学財団の皆様、本当にありがとうございます。